

## チャチャ登り ● 鈴木陽美

振花を一本、二本と見つけたり気の塞ぐまま家を出たれば  
 信号に触れんと伸ばした右腕を伐られて憮然とクスノキが立つ  
 黄の蕊を地に散らしたる未央柳びようやなぎかぜに負けたかあめに負けたか  
 真ん中のピースが一つ欠けたまま そんな気分を残した電話  
 アボカドの果肉にナイフをいれながら義母のかすれた声を思うも  
 血縁にあらざる家族のもどかしさ雨にふくらむ紫陽花の青  
 全身が脈打つような感情が怒りだったと気づく 夜更けに  
 癖のある義母の白髪義父が梳きときに鉢を入れてゆくらし  
 水たまりに柘榴の花が落ちて泳ぎつかれた金魚のように  
 花びらの奥に泉のあるごとく蜂一匹が花に溺れる  
 うつぶんを猫に聞かせて昼下がりに星のかたちのマッシュマロつまむ  
 ふるさとの乾いた空に鳴っていたささらさらさらポプラの葉擦れ  
 〈チャチャ登り〉のぼりて見たりナナカマドの色付くころの函館の街  
 半島の断崖の上の梢から生まれる鳥か 来世のわたし  
 くじら汁、ごっこ煮つけ 夫の恋うおふくろの味われは作らず  
 入眠時ミオクローヌス ラベンダーのポプリに眠りを助けてもらう  
 幸せな顔をしている人おらず「愛」がテーマの家族の絵画  
 まっすぐに背筋のぼしてわれを見る葉薊アカンサスには言えないことも  
 取返しつかない時を見せながらとろとろ溶けるアイスクリーム  
 見晴町「香雪園」でバスを降り坂をくだれば義母の住む家